



「日本産ゴミムシダマシ大図鑑」  
月刊むし・昆虫大図鑑シリーズ9.  
秋田勝己・益本仁雄共著.  
2016年11月30日.  
304 pp. (カラー図版128 pp.含む).  
A4判・箱入り. むし社, 東京.

私にとって馴染みの薄い甲虫の一つが、ゴミムシダマシである。好きか嫌いかと聞かれても、正直な話、何も特別の感情が浮かんでこない。では嫌いかといえば、そういうわけでもない。不思議に疎遠な理由をかつて追求してみたことはなかったが、第一著者である秋田勝己さんのお名前を見て閃くものがあった。思えばこの頃、甲虫屋のどのお宅に伺っても、ゴミムシダマシの標本をろくに見ることがないのである。

秋田さんは誰でもご存知のように採集の名人である。それも超ド級がつくほどの腕前である。野外だけでなく卓上採集の方面も相当なものであると聞いている。その悪名、もとい高名は全国隅々まで鳴り響き、気の弱い甲虫屋諸兄を震撼させているという。今やこれは甲虫界の定説である。

もっともその恐ろしさを直接は知らない。わずか1年だけ先輩という偶然が幸いして、私にはだいぶ遠慮がちに接してくださるからだ。秋田さんとは彼が蝶屋時代の頃からの付き合いだが、その後、何を思ったのか甲虫屋に転身し、いつの間にかゴミムシダマシの分類学者になっていた。それももうかれこれ15年あまりのキャリアをもっている。

数年前の夏に、約30年ぶりに三重の秋田さんのご自宅を訪ねて驚いたのは、甲虫類の標本点数の膨大さである。ゴミムシダマシはもとより、ゲンゴロウ、シデムシ、カミキリムシ等々、彼が好きなような甲虫のグループを徹底的に収集整理していて、これはもはや秋田博物館というほかになかった。

「こんなに集めてどうするの」と言いかけて、慌てて言葉を飲み込んだ。そのとき彼が口にしたのが、この日本産ゴミムシダマシ大図鑑の構想だったからである。

著者らが本書の序に書いているように、ゴミムシダマシは「甲虫愛好

家のなかでの評価は必ずしも高くない」。私もこれまで故なくそう思ってきた。甲虫愛好家が評価しないということは、当該グループの愛好家以外に誰も評価しないということである。人気のあるクワガタムシやカミキリムシならいざ知らず、そのような昆虫を扱った啓蒙書の出版は、普通に考えたら実現するものではない。だから、採算ベースではまず破たんしそうな出版企画を受け入れた、版元むし社の藤田宏さんは、前から密かに思っていたが、神様ではないかと思う。私ははからずも口が滑り、しかし本心でそうお伝えしたのだが、意外に繊細な秋田さんは、このときの私の失言を今でも気にされているようだ。

冒頭に書いたように私はまったく門外漢であるから、本書の専門的な内容については言及する資格をもたない。さらに性格が悪いから、ネガティブチェックをしたがる癖もあるのだが、そんな事情を前提にと断つたうえで、本書の読後感を述べてみたい。

まず何が素晴らしいかといえば、図版の美しさであろう。月刊むし大図鑑シリーズの売りであるから特筆すべき話ではないのかもしれないが、ゴミムシダマシの虫体特性に深く配慮した撮影が申し分ない。同シリーズ既刊書のさらに一歩先をいく仕上がりである。図版のために、完璧なまでに標本を洗浄・整形した著者らのこだわりは、偏執狂という賛辞を贈る以外に言葉が見つからない。さらに、標本がいずれも5センチ超の大きさで図示されているから、多くの場合、絵合わせで種の同定が可能である。

種の解説では、個体変異が大きく形態記載をやるのが難しい本科甲虫にあっては、丁寧な表現に細心の配慮がされていると見受けられた。唯一欲をいえば、属の記載か検索表があったら門外漢には便利なのだが、これも図版だけでおおよそ当たりがつくというのであろうか。

くわえて、日本産ゴミムシダマシ科の文献リストとシノニミィを含むチェックリストは、本科甲虫の世界的権威、益本仁雄さんの労作である。両リストの充実が、本書の学術書としての価値を大いに高めている。

今回の出版により、日本産ゴミムシダマシ科は、クチキムシ亜科



とハムシダマシ亜科を含む合計 464 種になった。著者らはこの数字を語んじてヨイムシと洒落ているが、それも当を得ているというのが率直な私の感想である。完璧な図鑑の出版は、虫の価値まで高めてくれるものらしい。

ゴミムシダマシに多少の苦手意識のあった方々も、これを機会にこの虫により親しんでみてはいかがだろうか。もっとも日本産の標本の重要など

ころは目下、著者らの手元に集結していると推察するから、比較する標本自体が虫屋世間に不足しているに違いない。であれば、本書を傍らに新しく標本を採集して歩くのも、それはまた私たち甲虫愛好家にとって、極上の楽しみではなからうか。

(株式会社 環境指標生物・新里達也)

### 【短報】トヨハシヒメカタゾウムシの生息環境について

トヨハシヒメカタゾウムシ *Arrhaphogaster inouei* Morimoto, 2015 は、近年愛知県豊橋市より記載された種で、これまでは近似のケブカヒメカタゾウムシ *A. pilosa* Roelofs, 1873 と同定されていたものである(伊澤ら, 2009)。本種は豊橋市の石巻山およびその周辺の豊川岸など豊川水系周辺のみで、4~5月にかけて散発的に採集されていること以外、生態的知見は知られていない(伊澤, 2009; Morimoto *et al.*, 2015)。また、本種の既知産地は豊橋市に集中しているが、豊川水系上流に位置する愛知県北設楽郡設楽町からもケブカヒメカタゾウムシの記録があり(穂積, 1990)、この標本も本種である可能性が高い。

同属の他種がおもにスギやヒノキの植林地内やその周辺で採集されていることから(Kojima, 2014)、トヨハシヒメカタゾウムシの模式産地ならびにその周辺と同様な環境で調査を行ったところ、本種も類似の環境に生息していることが明らかとなったので報告する。本種は同属他種と同様、ウツギ属やアジサイ属(アジサイ科)、ムラサキシキブ属(シソ科)、フジ(マメ科)、コクサギ(ミカン科)、イヌビワ(クワ科)、ヒサカキ(モッコク科)、アオキ(アオキ科)やエノキ、ケヤキ(ニレ科)、クマノミズキ(ミズキ科)の幼木など、植林地内の各種灌木から得られた。また、本属の種は植林地内でも沢などに隣接し、ある程度湿度が保たれた環境で得られることが多いが、本種もそのような環境で得られやすかった。さらに、これまでの採集記録は4月下旬から5月のようだが、6月に得られた標本を所持しているの、あわせて報告しておく。

検視標本: 3 exs., 豊橋市石巻山, 16.vi.2013; 10 exs., 同所, 12.v.2016; 3 exs., 豊橋市石巻町神郷, 29.iv.2016; 4 exs., 同所, 12.v.2016; 12 exs., 豊橋市嵩山蛇穴, 29.iv.2016; 14 exs., 同所, 13.v.2016。(すべ

て小島採集)。

今回は時間の都合で、針葉樹植林地とその周辺環境のみの調査しか行っていないが、針葉樹植林地に接していない広葉樹二次林内などの環境でも本種が生息するかどうか今後確認する必要がある。本属の種は過去の古い記録を除くと、東京、千葉、神奈川、静岡、伊豆諸島など関東地方とその周辺に分布し(Morimoto *et al.*, 2015)、愛知県から記載されたトヨハシヒメカタゾウムシは本属の西限種となる。また、前述の通り、本種の確実な産地は現状では豊橋市のみであるが、その他の周辺地域を含めた調査が望まれる。豊橋市に隣接する静岡県浜松市では、佐鳴湖においてケブカヒメカタゾウムシの記録があり(加藤ら, 2008)、とくに浜松市をはじめ静岡県西部での調査が望まれるとともに、両種の分布状態を明らかにする上で、静岡県中央地域での調査も望まれる。

なお、本調査は一部日本学術振興会科学研究費補助金(課題番号 15K06937)の助成を受けて行われた。

### 引用文献

- 伊澤和義, 2009. 愛知県のゾウムシ類標本リスト. [http://www.ob.aitai.ne.jp/~k\\_izawa/zou/aichi/aichi.htm](http://www.ob.aitai.ne.jp/~k_izawa/zou/aichi/aichi.htm) (2016年10月21日閲覧)。  
 伊澤和義・井上昌次・白井勝巳, 2009. 愛知県のゾウムシ類. 地域甲虫自然史 (5), 70 pp., 8 pls. 日本甲虫学会, 大阪。  
 穂積俊文, 1990. 愛知県の甲虫類 (I). 愛知県の昆虫 (上): pp. 232-308. 愛知県昆虫分布研究会, 愛知県。  
 加藤 徹・多比良嘉晃・塩澤靖弘, 2008. 佐鳴湖周辺の昆虫相. pp. 470-523. In 静岡県産業部振興局研究調整室編, 「快適空間『佐鳴湖』の創造」研究報告書: 静岡県戦略課題研究, 579 pp., 静岡県。  
 Kojima, H., 2014. Occurrence of a celeuthetine weevil, *Arrhaphogaster hachijoensis* (Coleoptera, Curculionidae) in the Izu Peninsula, Honshu, Japan. *Elytra*, Tokyo, (n. s.), 4: 155-158.  
 Morimoto, K., T. Nakamura & K. Kannô, 2015. The Insects of Japan, 4. Curculionidae: Entiminae (Part 2) (Coleoptera). 758 pp., 120 pls., Touka Shobo, Fukuoka.

(小島弘昭・林本真幸 東京農業大学昆虫学研究室)